

## 序 文

### 文

産業革命は近代社会成立の基本であり、現代日本の姿を理解するために研究されるべき重要課題であることは云うまでもない。産業革命そのものが歴史的発展の一時期として理解されるために、必然的に歴史的課題であると考えられている。したがって地理的観点にたつて行われる研究が比較的すくなかったのも止む得なかつた。しかし社会の進展は単に歴史的事象としてのみ、とらえられるものでなく、地理的観点に立つ部面も多いのである。従来地理的観点にたつ産業革命の研究がなされなかつた憾があつた。現代日本の姿を追求するならば、当然産業革命までさかのぼるべきであつた。それが敢えて行われなかつたのは、前述の通り、歴史的分野であつて、地理的分野でないと考えられたからであらう。しかし、最近歴史地理学的な考え方が盛んになると、当然これらの盲点や矛盾が露呈されてきた。かくて、産業革命の発展に伴う、もろもろの地理的事象の追求が歴史地理学的な立場からなされるようになった。特に新進の地理学者のうちに、その傾向が強く、若い精力的な研究がなされつつあり、着々その成果をあげつつあるのは、敬服にたえない次第である。我が歴史地理学研究会も昨年度のシンポジウムを産業革命期における歴史地理としたのも、一つはこうした難勢を洞察し、産業革命期の歴史地理学的研究の推進力たらんとしたからであつた。

これによって歴史地理的分野の領域を一段と拡張せしめることにもなつた。紀要六号の主題を産業革命期の歴史地理としたのも、如上の理由からでもあつた。第六号は原稿を会員につのるとともに、日頃産業革命期ととりくんでいられる、会員の方々に特に寄稿をこうて成立した次第である。したがつてその内容もバライティにとみ、獨創性にとみ、従来の歴史地理の論文には見られない、新鮮さがあふれている。試みにその内容の一部にふれてみれば、産業革

### 1 序

命の基礎として鉱業の開発がとりあげられているが、鉱業開発に伴う諸事象の展開、さらに経営にいたるまでとりあげ、方法論として歴史地理学的見解の特質を見いだすことができるであろう。紡績業、これも産業革命の重鎮であるが、その紡績業にも先進地とそうでない地域の具体的な歴史地理的研究がなされている。以上の他に夫々充実したものが多く、その内容、研究方法について新しい歴史地理学の動向を示唆するものが多く歴史地理学の研究分野を著しく拡大、その独自性を主張したとしても過言ではない。歴史地理学はもはや歴史学や地理学の補助学ではなく、はっきりとその独自性を認める事ができる。本紀要に掲載され諸論文を熟読していただくならば、歴史地理学的方法論で、解釈すべき広大な分野が新たに加えられた事を理解することができると思う。本巻は歴史地理学の新しい分野の開拓に成功したと見ても過言ではない。

本会の紀要もこれで第六号、さらに来年度は第七号を重ねてゆく計画である。現今の出版事情のもとでこれだけの仕事をつづけてゆくことはまことに困難なことである。むしろ驚きでさえある。これも畠山文化財団の御援助によるものであることを心から感謝するとともに、会員諸民の絶大な御後援をお願いする次第である。

一九六四年十月

三友 國五郎